

片づける

三ツ橋よしみ

昨年、母がなくなつた。遺品を前にして、姉とふたりで整理した。家の二階に、衣装箱が40個ほどあつた。洋服、セーター、上着、コート、着物などがぎっしりだつた。値札のついたまま、衣装箱のなかで流行遅れになつてしまつたワンピース。黄ばんだ絹のブラウス。箱を開けるたびに、20年、30年の時がよみがえつた。

作業のはじめは、リサイクルが出来る服はないか、一つひとつ傷み具合をチェックしていた。ところがあまりの品数に、目と心が疲れた。結局、目をつぶつて、機械的にゴミ袋に詰めこんだ。

「お母さん、なんでこんなに洋服を、買ったのかしら。同じようなものばかりじゃない」

とわたしが言うと、姉が母のかたをもつた。

「人のことはいえないのよ。わたしたちだって似たようなものよ。洋服ってなぜか増えちゃうのよ。お母さんの遺伝かしら。街へでかけるでしょ。デパートに立ち寄る。ショーウインドウによさそうな服がならんでいる。近くによつてながめる。値札をちらつと見ると、おもつたより高くない。店員さんが寄つてきて、『お買い得ですよ』とか、『今年の流行なんです』とか、耳元で言う。

そして、ちよつと身体にあわせてみようかしらと思う。鏡をのぞく。『よくお似合いですよ』とかなんとか言われる。『そうかしら』とまんざらでもない気分。『こんど旅行に行くときに着ようかな』と思う。そして気がついたときは、もうデパートの紙袋をかかえて家にかえる途



中。はな歌なんか歌ちやってるのよ」

「それって衝動買いじゃない？」

と言うと、姉が首を振る。

「ぜんぜん違うとおもうけど。だって大切なのはプロセスなの。洋服を見つけて鏡をみる。そのときにいろいろなことを考えるでしょ。この服にはあの靴はどうか、あのバックはどうか。お友達と行く海外旅行にはどう？ クリーニングはできる？ 縫製は大丈夫？ 服を選ぶとき、頭の中を駆けめぐる様々なおもい。すごく脳を使ってる感じがするわ。すごく集中してるの、服を選んでるときって。その時間の興奮が、たまらないのよ」

その後、今年になって、姉夫婦が引越しをした。

一軒家を手放し、世田谷のマンションにうつった。長年住みなれた一軒家には愛着もあったが、六十五才をすぎて、庭の手入れが億劫になったらしい。買い物や病院が遠く不便だったこともあって、狭いが便利のよい都会のマンションを選んだのだ。バリアフリーで小さなテラスがついていた。老夫婦にはこれで十分よと、姉は言う。

母の山のような遺品にこりてか、姉は引越し前に多くのものを処分した。食器棚、机、本棚、本、衣類など、結婚以来の思い出がつまった品ばかりだった。

「泣く泣く捨てたの。だってマンションは収納が少なくて入りきらないもの」

リビングは、小さなテーブルとソファだけで、閑散としていた。

「洋服、たくさん捨てたの。もう着るものがないくらい」

姉は、紅茶のティーカップを、両手でつつみこんだ。

「捨てなきゃよかったって、後悔してるものもあるの。さつきも、確かあの服があったはずって、さがしはじめたの。そして気がついた。あれもう捨てちゃったんだって。もうないんだって。それってとっても悲しい」

姉はため息をつき、紅茶をのんだ。縁が金色で、小花の模様が愛らしいカップ。捨てられずに残した唯一のカップだという。磁器の乳白色がつつやつつやしていた。

すっきり何もないうマンションの一室で、白髪が目立つようになった姉はすこし寂しそうだった。